

開催地名：長野県長野市	
開催日時	令和元年9月27日（金） 9：00～10：35
開催場所	長野市立芹田小学校
語り部	吉田 亮一（宮城県仙台市）
参加者	長野市芹田小学校 5・6年児童 約250名
開催経緯	本市では、近年大きな災害が起こっていないため、防災活動をはじめ地域活動に参加している人が少なく、地域連携が低いと言える。また、市民（特に若年層）の災害に対する防災意識が低いと感じている。さらに、災害に対する備え（備蓄を含む）が少ないと認識しており、災害に対する意識改善の一助とするために本講演会を企画した。
内容	<p>（1）防災の基本とは</p> <p>世界中で、様々な自然災害が発生している。私たちが暮らす日本でも、地震、津波、台風、火山の噴火、竜巻、豪雪、そしてゲリラ豪雨などが挙げられる。このような自然災害はなぜ起こるのか。難しい問題であるが、地球自体が動いており、生きているから、地球上の各地で様々な現象が発生し、時にはそこで生活する人間に被害が及んでしまうのであろう。そう考えると、私たちは自然災害と一緒に暮らしていかなければならないということが言える。</p> <p>それでは、自然災害と一緒に暮らしていくにはどのような点に気を付けたらいいのか。それは、災害についてしっかり考えるということ、そして考えたことを踏まえて行動するということである。どの地域でも発生する可能性がある自然災害のことをしっかり理解して、危機感を持つということが大切である。つまり、想定以上の備えをすることが、防災、減災の基本となるということである。</p> <p>（2）災害に対する備え</p> <p>災害が起こると、コンビニやスーパーの商品は品薄になってしまうので、東日本大震災以後、食料、飲み水については1週間分を用意しておくように案内している。</p> <p>また、お風呂の水は、断水になってしまったときに、トイレのお水として使用できるため、いつも浴槽にお湯が入っているように習慣づけておくと、災害が発生したときに有効である。</p> <p>（3）地震から身を守るために</p> <p>大地震はいつ起こるか分からない。小学生であれば下校時ということも考えられる。揺れから身を守るためにランドセルを頭にのせる、と答える児童が多いが、それだけでは足りない。例えば、ブロック塀は道路側に倒れるようにできて</p>

いるため、頭だけでなく背中もガードしないといけない。下校時に地震に遭遇したら、後ろに手を回してランドセルの金具をはずし、肩の方からふただけを頭にかぶせる。そして、体操座りすることで全身を守ることができる。また、寝ているときに地震が発生したら、立ってうろうろせず、布団をかぶって丸まり、“ダンゴムシ”になることが有効である。さらに、枕元には、靴下、スニーカー、ヘッドライト、防犯ブザー、イヤホン付き携帯ラジオ、雨用カッパの6点セットを入れた防災袋を日頃から置いておくと良い。

#### (4) 東日本大震災を踏まえて

東日本大震災が起こったとき、私の住む地域では全世帯が5日間停電し、ガスは3、4週間、水道は2週間止まった。指定避難所の茂庭台中学校では、避難所が17日間開設され、最大時は200名の方々が避難していた。地域には、高齢者と小・中学生しかいなかったが、避難所はすぐに開設しなければいけない。また、避難所においても、会社員や高校生は早朝から通勤・登校してしまうため、運営には避難所に残っている小・中学生等の力が必要であった。ありがたいことに、避難所では、小・中学生が大活躍してくれた。震災当日、私が一時避難場所にいると、中学生が走ってきて、「避難所の準備ができたので避難してきてください。」と伝えてくれた。避難所に移動すると、中学生が自らのアイデアで避難所の床に柔道用の畳やマットを一面に敷いて、私たちを迎えてくれた。その後、避難所内では必要事項の掲示やごみの分別など、小・中学生が自発的にアイデアを生かして行ってくれた。毎朝、避難所を掃除してくれたのも小学生であった。

このような経験から、私は年少者への防災教育は非常に重要だと実感した。いざというとき、彼らは大きな役割を担ってくれる。防災訓練の担当者をお願いしたいのは、地域の避難訓練や避難所設営訓練に是非児童・生徒を加え、受付や設営、炊き出しなどを体験させてほしいということである。



開催地より

防災の基本や、災害に対する備えについて、東日本大震災での体験談をわかりやすくお話しいただいた。また、避難所での具体的な工夫について、実際に体験

	させていただき、子どもたちは積極的に参加していた。
--	---------------------------